

あの世にはあの世言葉のもしあらば喃語のひびきの類かもしれぬ 白岩 裕子
落文と呼ばれる虫の名を聞けばもう一度乗せる様の葉に 八月号・田中 章義

こもごもに介護の手の平見せあひていと賑々しミニクラス会 児島 昌恵
白濁の乳に汚れた哺乳瓶百四十本を湯に浸け洗う 九月号・高橋 秀

読みさしの本をひらけばイルペール、サミュエル、リュシー、誰が誰だか 鈴木 陽美
渋滞を避けて迷える町はずれブタクサの群れにジブシーのすむ 石田 郁夫

一年間無選歌欄と最初の選歌欄を担当させてもらった。一年をふり返つてみると、無選歌欄の中では、今年第三歌集『磐梯』で前川佐美雄賞を受賞した本田一弘の歌が特に充実しており、読みごたえがあった。本田のテーマの一つである福島にこだわった作は毎月さまざまな面から考えさせられることが多く、訴えかけてきた。この秀歌三十首に取り上げた以外にも良い歌が多かった。実力派の大口玲子の育児の歌、田中拓也の夫婦の歌、小川真理子の仕事の歌もそれぞれ心に残る作品が多くあった。ここでもやはりテーマの大切さを感じた。

若手では、佐佐木定綱、笹本碧が自らのみずみずしい感性を活かした歌を詠んでおり、注目した。今後もしな若手である。その他では、猫の歌に秀作が多い山崎波浪や、教師の仕事を詠む山口明子、人形の歌を詠む野原亜利子、沖繩をテーマに詠む屋良健一郎らの歌に注目した。これらのことからわかるように、自らのテーマに真摯に向き合う姿勢こそが秀歌を生み出して行く秘訣といえるだろう。その他、海外生活ならではの石田郁夫や伊東泰子の歌にも立ち止まらされた。心の花は海外在住の会員も多く増えている。今後ますます海外詠に期待をしたい。

秀歌三十首にはとても選びきれないほどの秀歌があり、他にもここに挙げたい歌がたくさんあった。九月号からは右に挙げた以外にも、
・紅茶から薄切りレモン引き上げてペロー
チエにいるわたしと思う 藤島 秀憲
・いちりんの雄花を摘んで葉の陰の雌花に付けたごめんなさいよ 中村 由美
・パローロはワインの王様ひと息に飲みつぎ宵に酔いて帰りぬ 山下 葉子
に注目した。
作者からお手紙をいただくことも多く、励まされた。この場を借りてお礼申し上げます。
一年間ありがとうございました。